

第19回大会報告記

大道千穂

第19回日本アイリス・マードック学会は、青山学院大学で2017年11月18日（土）に開催された。午後12時30分から総会があり、ハラ会長から参加者の緊張を一瞬にして解きほぐすような温かく、ユーモアあふれる開会の辞があった。井上澄子副会長からは午前中に行われた理事会についての報告があった。来年度の開催校は京都の京都文教大学の予定、開催日については開催校の日程を最優先で決めることになるが、おそらく10月になるこのことであった。また、来年度の執行部体制の報告があった。会長にはポール・ハラ氏が再任される。副会長は井上氏が勇退され、後任には井内雄四郎氏、並びに岡野浩史氏が選任された。長年にわたり事務局をお引き受け下さった岡野氏への感謝のことが述べられた後、事務局の後任に中窪靖氏が選任されたことが報告された。これに伴い、中窪氏が新たに理事に選任された。これまで中窪氏、内藤亨代氏のお二人にお引き受けいただいていた監事の仕事は内藤氏一人に任されることになる。会計はこれまでどおり岡野氏がお引き受け下さる。

理事会報告のあと、ハラ会長から来年度の学会にはイギリスからアン・ロウ氏、あるいはオーストラリアからジリアン・ドゥーリー氏、運が良ければ両氏を講演者としてお迎えできる可能性があることが報告された。最後に、2016年度の会計の決算報告、2017年度の会計中間報告、2017年度の前算案が承認された。

今年の研究発表は石本弘子氏の「*A Word Child*における Hilarly の道徳観と Murdoch の道徳観について」、フィオナ・トムキンソン氏の「*Iris Murdoch and The Tale of Genji*」、斎藤佳代子氏の「『黄金のノートブック』と『苦海浄土』の接点」、ウェンディ・ジョウンズ・中西氏の“Any Day is a Kissing Day” : *Iris Murdoch's Letters as Expressions of Intimacy* の4本であった。司会はそれぞれ中窪氏、榎本真理子氏、井内氏と大道が担当した。

石本氏は悪徳の主人公ヒラリーを造形したマードックの意図を解き明かされた。類稀なる才能を与えられ、それ故、悪漢ながらたしかに人間的魅力を持つヒラリーを描くことで、道徳観が欠如した者でも魅力を持つ者がいることを読者に訴えているというご発表は、マードックの温かい包容力と、そして、発表者ご自身の優しさに満ちていた。

トムキンソン氏は、マードックの諸作品に現れる『源氏物語』の影をつぶさに追ひ、従来からよく指摘がある猫を盗むエピソードだけではなく、マードックの多くの作品において、小道具や物語の設定、登場人物たちの心情、そして本の表紙絵にまで『源氏物語』との接点がみつかることを説得力ある細やかな分析によって示された。

斎藤氏はマードックと同じ年に生まれたドリス・レスリングの大作『黄金のノート』(1962)と、同じ60年代に第1巻が出版され、2004年の第3巻出版をもって完結した石牟礼道子の『苦海浄

土』を、両作家の言語への不信と信頼という観点から考察された。言語への信頼、人間が物語を紡ぐことへの信頼が揺るがなかったマードックとは異なり、レッシング、石牟礼は言語こそが人間の表現手段でありながら、言語においては描き切れないことがあるということにひじょうに意識的であった。言語を表現手段として、言語と、言語から漏れ出る領域の両方を表現しようとした両作家の試みが丁寧に分析された重厚な20分間であった。

中西氏は、時に「書簡ストーカー」と言われることすらあるほどに、生涯にわたって多くの手紙を書き続けたマードックにおける、手紙の意味を分析された。手紙を書くとき、書き手は読み手を頭に描き、心を推し量って語りかける。つまり手紙を書くとは相手を自分の内に取り込み、その心と体を再創造する行為なのである。マードックにとっては手紙を書くという行為が実は最も肉体的で親密な行為であり、時にそれは肉体と肉体による結合よりも深い結合を意味する、という分析から、手紙を書くという日常的経験が持ちうる深さと可能性に改めて気づかされた。

本年度の特別公演は東京学芸大学名誉教授の岡本靖正氏による「マードックとシェイクスピア」、

司会は岡本氏と学生時代からの長いお付き合いでいらっしゃる井内雄四郎氏であった。マードックにとってシェイクスピアが偉大なのは何故なのか。彼女の道徳的著作を中心に、マードックの小説家としての立場や主張、それとシェイクスピアとの関係が丁寧に解析された結果、以下のようなことが明らかにされた。不透明な現実世界を認識し、理解する最も大切なツールは善き（＝自由な）想像力だ。しかし同時に、現実を曲解し、真実からも自由からも人間を遠ざけてしまう最大の原因もまた、悪しき想像力、幻想だ。最も偉大な作家とは、最も善き（＝最も自由な）想像力の持ち手で、自分と全く異なる他人を小説中に住まわせることができる人物であるとマードックは考える。つまり自己を通じて他者を存在させることができる愛の人である。岡本氏によれば、マードックにとって、この最も自由で、最も偉大な作家がシェイクスピアであった。

学会終了後はキャンパス横のアイヴィー・ホールに場所を移して懇親会が行われた。特別講演講師の岡本氏のご参加も得て、約2時間の和やかな談笑の後、解散となった。